

美里町人口減少社会対策会議第1次中間報告書

平成27年3月31日

1 はじめに

我が国が現在直面している「少子高齢化・人口減少」問題への対応については、今後長い時間を必要とされます。

美里町人口減少社会対策会議は、平成26年10月に庁内組織として設置され、その後関係職員で調査・検討を行ってきました。しかし、今後一層深刻化する「少子高齢化・人口減少」問題に対しては、職員はもとより多くの町民の英知とエネルギーの結集が不可欠であります。

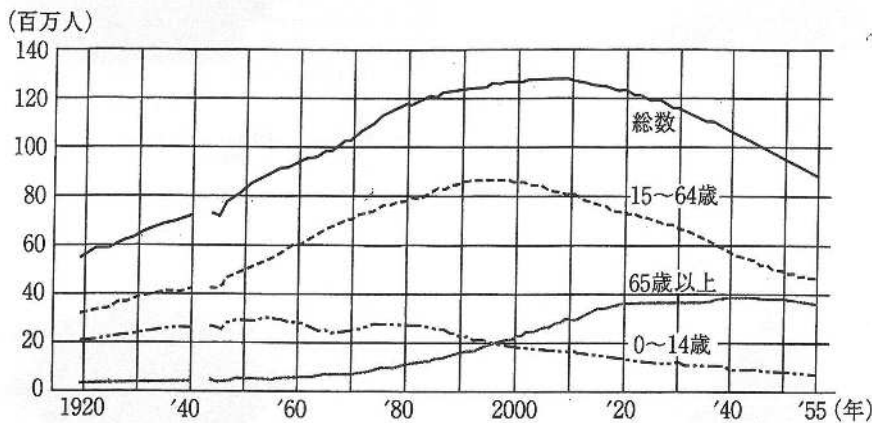
このことから、第1次中間報告書については、これまで対策会議で収集した資料を視覚的に整理することから、本町のこれまでの人口推移と将来人口について、現状と課題を広く町民の皆さんと共有することを目的としてまとめ、報告するものです。

2 これまでの人口推移と今後の人口推計

(1) 全国の人口

最初に、本町の人口を考察する前に、我が国の全国人口のこれまでの推移と将来人口について、その概要を整理しておきます。

図1 全国人口 年齢3区分別人口の推移(1920～2055年)



資料：総務省統計局『国勢調査報告』、『人口推計年報』および国立社会保障・人口問題研究所『日本の将来推計人口』(2006年12月)

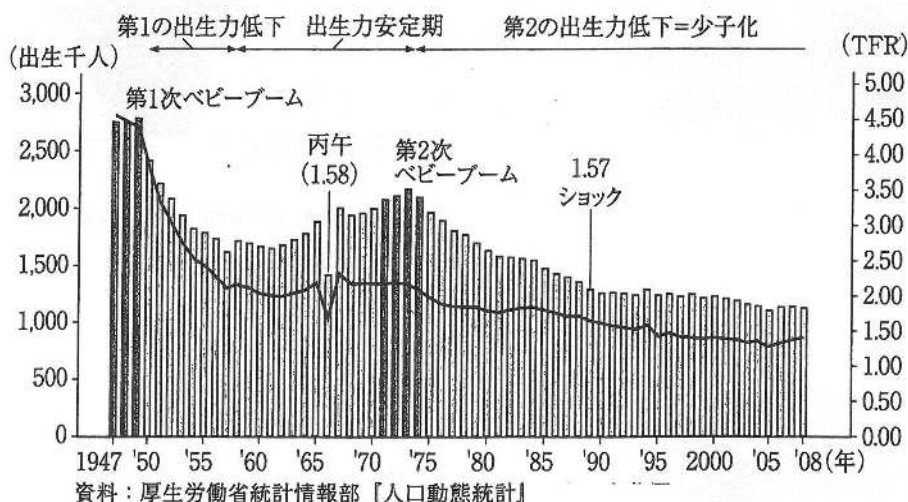
上の図1のグラフから、我が国の総人口と年齢3区分人口の、これまでの推移及び今後2055年までの将来人口を見ていきます。

図1によれば、これまで増加を続けてきた我が国の人口は、2005-2010年をピークと

して人口減少期に突入しました。今後も一環して減少は続くと思われています。その結果、2055年には現在の人口の2/3程度まで減少すると推計されています。

次に、年齢3区分の人口を観察します。生産年齢人口(15~64歳)については、総人口の経過から早い95年にピークを迎え、その後減少に転じました。年少人口(0~14歳)については、55年頃から緩やかに減少し、95年には高齢人口(65歳以上)を下回っています。また、一方の高齢人口については、一貫して増加の傾向にあり2050年には生産年齢人口に迫る勢いです。しかし、増加を続ける高齢人口も2050年にはそのピークを迎え、その後減少に転じると見られています。

図2 全国人口 出生数と合計特殊出生率の推移(1947年~2008年)



次に、1947年~2008年の出生数と合計特殊出生率の推移について見ていきます。

出生数は、1947年から49年まで戦後の第1次ベビーブームによって急速に増加しました。しかし、その後1950年から60年代前半にかけて急激な減少に転じています。この急激な出生数の減少には、戦後政府が推進した家族計画運動の影響がはたらいていたと考えられます。(第1の出生力低下)

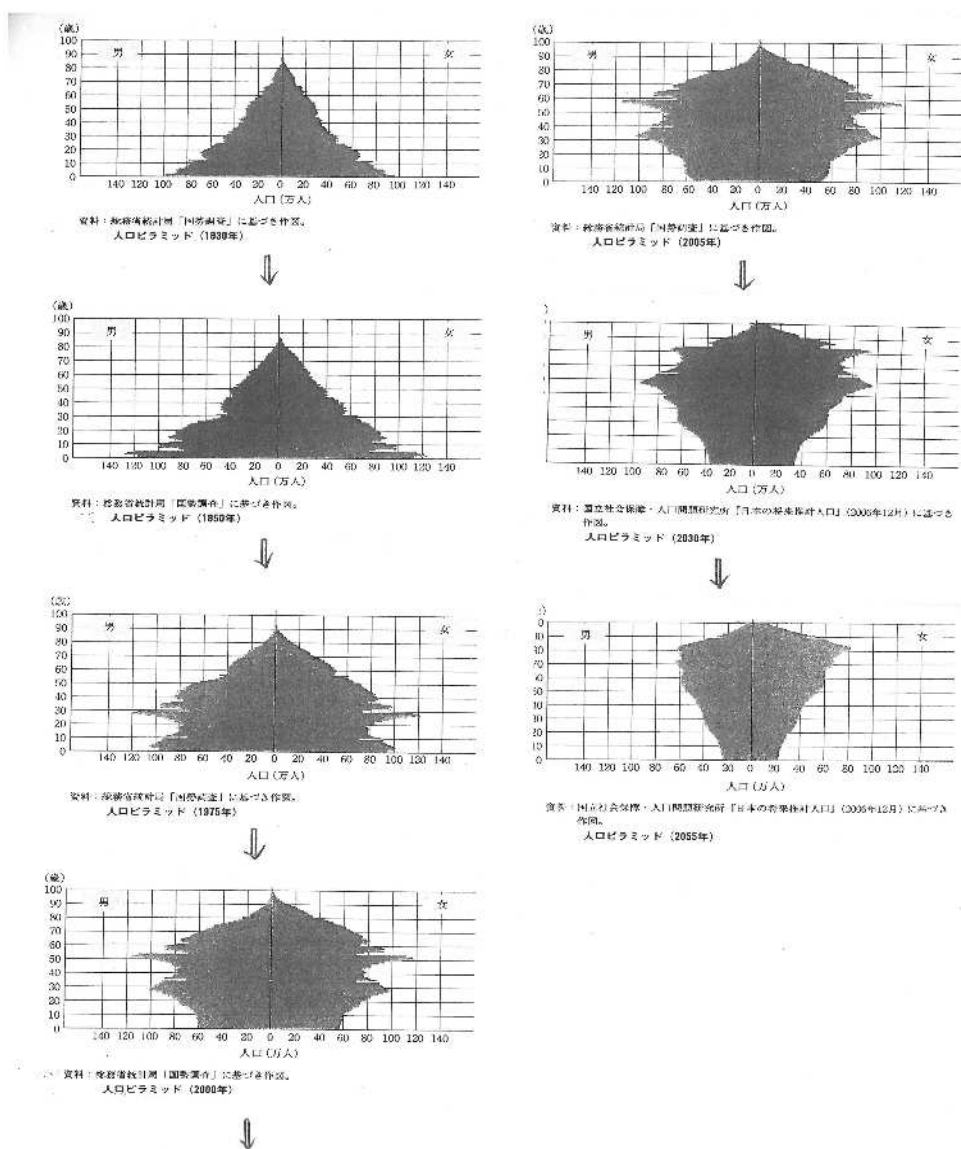
その後、出生数は横ばいとなり、60年代前半から70年代前半にかけて出生数は緩やかな増加を続け、第2次ベビーブームが終わる70年代後半から再び出生数は減少に転じました。70年代後半以降の出生数の減少は緩やかながらも、その後長期間にわたって続き、今日の少子化問題を招く結果となりました(第2の出生力低下)。

グラフ上の50年から60年代前半にかけての「第1の出生力低下」は、経済成長を優先した国の政策的な現象の一つと言えます。しかし、70年代後半以降の「第2の出生力低下」には政策的なものがあったとは思えません。政策的な人口減少と非政策的な(自

然な)人口減少の異なる現象をグラフ上で比較することができます。この二つの曲線の比較から、50年から60年代前半にかけての政策的な「第1の出生力低下」が5年乃至10年のわずかな期間の中で、いかに急速な勢いで出生力を低下させていたかがわかります。

最後に下の図3から、1930年から2055年までの人口ピラミッド(人口構造)の変化について見ていきます。我が国の1930年(昭和5年)の人口ピラミッドは、図3の左上のグラフのように富士山型のきれいな三角形となっていました。しかし、その後、きれいな三角形はくずれ、歪(いびつ)な形へと変化を続けていきます。この歪な形への変化は止まることなく、2000年頃からはピラミッドの上半部が横に拡張し、下半部が縮小して先細りする不安定な形へと変化していきます。現在では人口構造の極めて不均衡な社会が形成され、そしてなお今後も一層不安定な形へと変形を進化させています。

図3 全国人口 人口ピラミッドの変遷(1930年~2055年)



(2) 美里町の人口

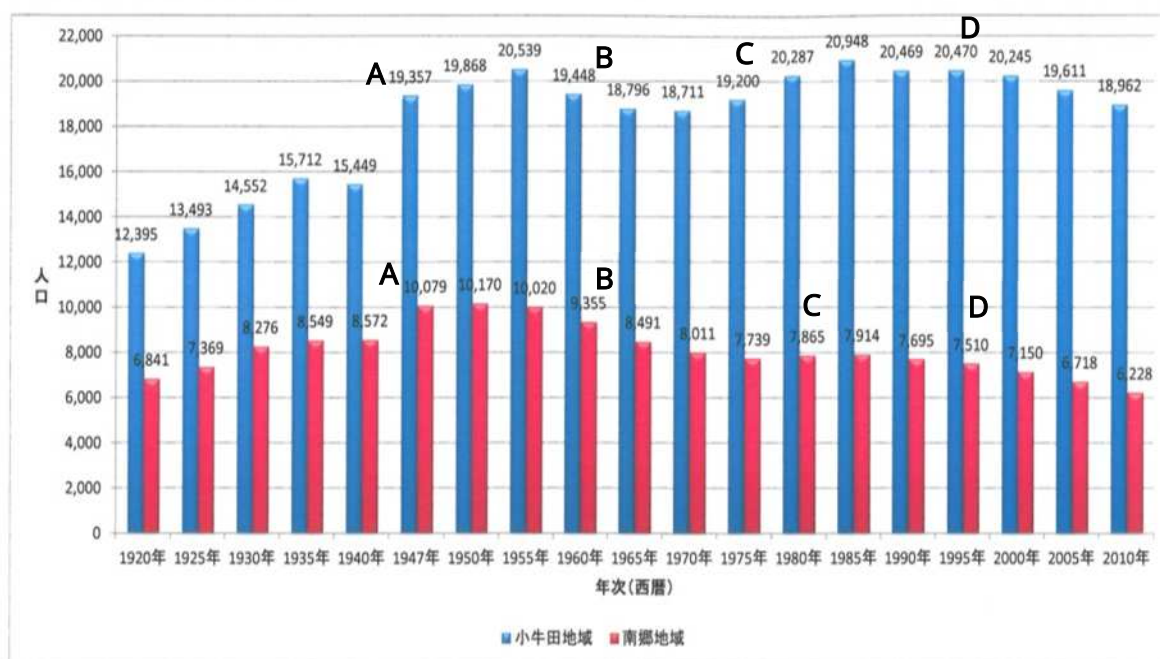
前ページまでの(1)によって、全国人口は今後減少を続けていくこと、更には不均衡な人口構造が変形を一層進化させていることを確認することができました。

それでは美里町の人口はどうでしょうか。これまでどのような推移をたどり、今後どのように推計されるのでしょうか。

1) 小牛田地域、南郷地域の総人口の推移

はじめに、小牛田地域と南郷地域のこれまでの総人口の変化について見てみます。下の図4は、1920年から2010年までの過去の人口推移について、小牛田地域と南郷地域に分けて棒グラフであらわしましたものです。グラフから小牛田地域、南郷地域、それぞれの地域ごとに傾向を観察してみましょう。

図4 美里町人口 小牛田地域、南郷地域の人口推移(1920年~2010年)



小牛田地域(青の棒グラフ)

1940~47年のベビーブームを含めて、その後1955年までは全国の傾向と同じく急速に増加しています(Aの部分)。しかし、55年以降70年までは減少に転じます(Bの部分)。これは高度経済成長による若年労働者の県外流出と政府の家族計画運動の推進による出生数の減少の影響によるものと考えられます。

また、75年以降の増加(Cの部分)は、桜木・山の神・大口・山前・峯山・蜂谷森などの住宅分譲地の造成と県営峯山住宅の建設など、住宅政策によって転入者が増加したことによるものと思われます。その後は、緩やかな減少傾向が長く続いてきました(Dの部分)。

小牛田地域のこれまでの人口推移で特筆すべき点は、75年以降の住宅政策による人口増加(Cの部分)です。住宅分譲地の造成による住宅政策が第2次ベビーブームと相まって、若い世代の家族層を町内へ呼び込むことができたものと思われ、これが人口増加につながり、1985年には小牛田町としてこれまで最高の20,948人の人口を記録しました。

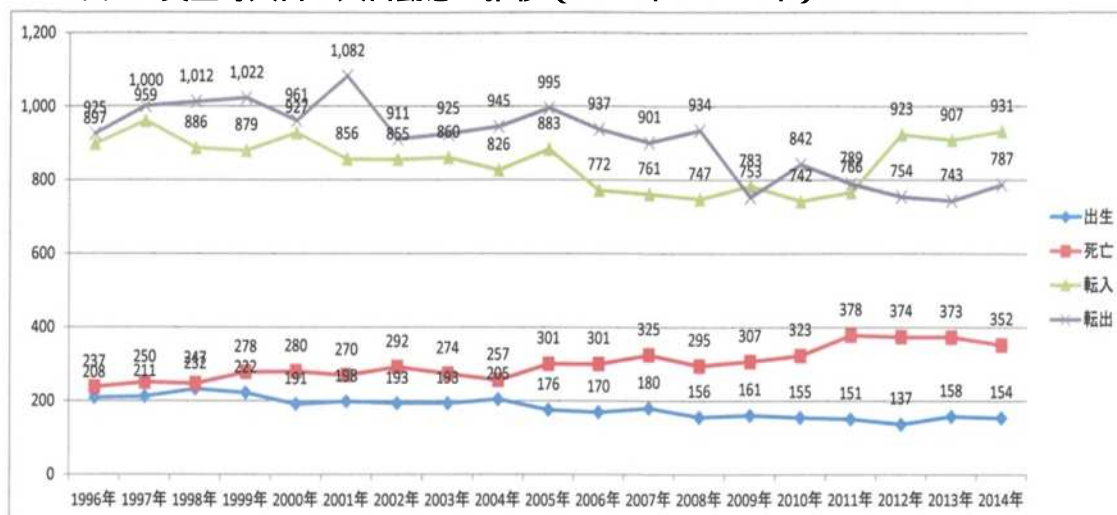
南郷地域（赤の棒グラフ）

特に目立った住宅政策を行ってこない南郷地域では、小牛田地域の75年以降のような人口増加の時期は特に見られません。小牛田地域で人口が増加した75年から85年にかけて、南郷地域の人口は横ばいの安定期が続いていました。南郷地域においては、戦後の1950年に最高の10,170人を記録し、その後においては増加することなく、漸次緩やかに減少を続けてきました。しかし、旧小牛田町の住宅政策による75～85年の人口増加期を除けば、増減変化の緩急とその幅に強弱・大小の差はあるものの、小牛田地域も南郷地域も全体的には同様の傾向の中で、人口推移をたどってきたと見ることができます。

2) 自然増減、社会増減の人口動態の推移

次に、転入・転出と出生・死亡の人口動態について観察します。下の図5のグラフから、自然増減と社会増減の18年間の推移の傾向を観察してみます。

図5 美里町人口 人口動態の推移（1996年～2014年）



自然増減としては、1990年代後半から年々その格差が拡大していることがわかります。2000年頃から死亡数の増加と出生数の減少という二つの減少要因が長期にわたって継続されてきました。しかし、死亡数については2012年から、出生数については2013年から、やや持ち直してきていることがグラフの数値からわかります。

また、社会増減としては、転出者数と転入者数がともに減少の傾向にあり、全体的に人口移動が縮小の傾向にあることをグラフから読み取ることができます。しかし、2011

年になると転入者が急速に増加していますが、これは駅東地区の分譲住宅地への転入者の増加によるものであることは言うまでもありません。

3) 5歳区分年齢別人口の推移

次に、5歳区分年齢別人口の推移について観察します。図6は1985年、1990年、1995年、2000年、2005年、2010年の各年に実施した国勢調査から、5歳区分年齢別人口を小牛田地域（上段）と南郷地域（下段）に分けて棒グラフであらわしたものです。

図6 美里町人口 5歳区分年齢別人口の推移（1985年～2010年）

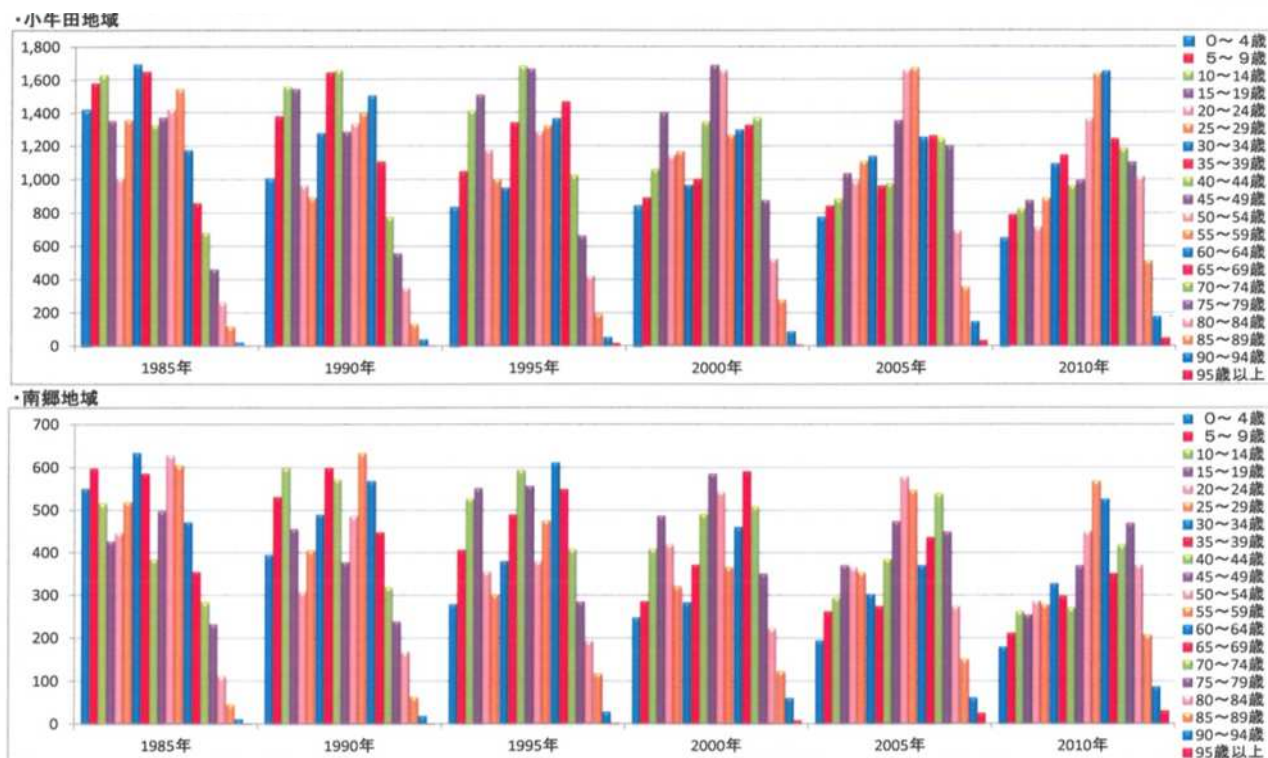
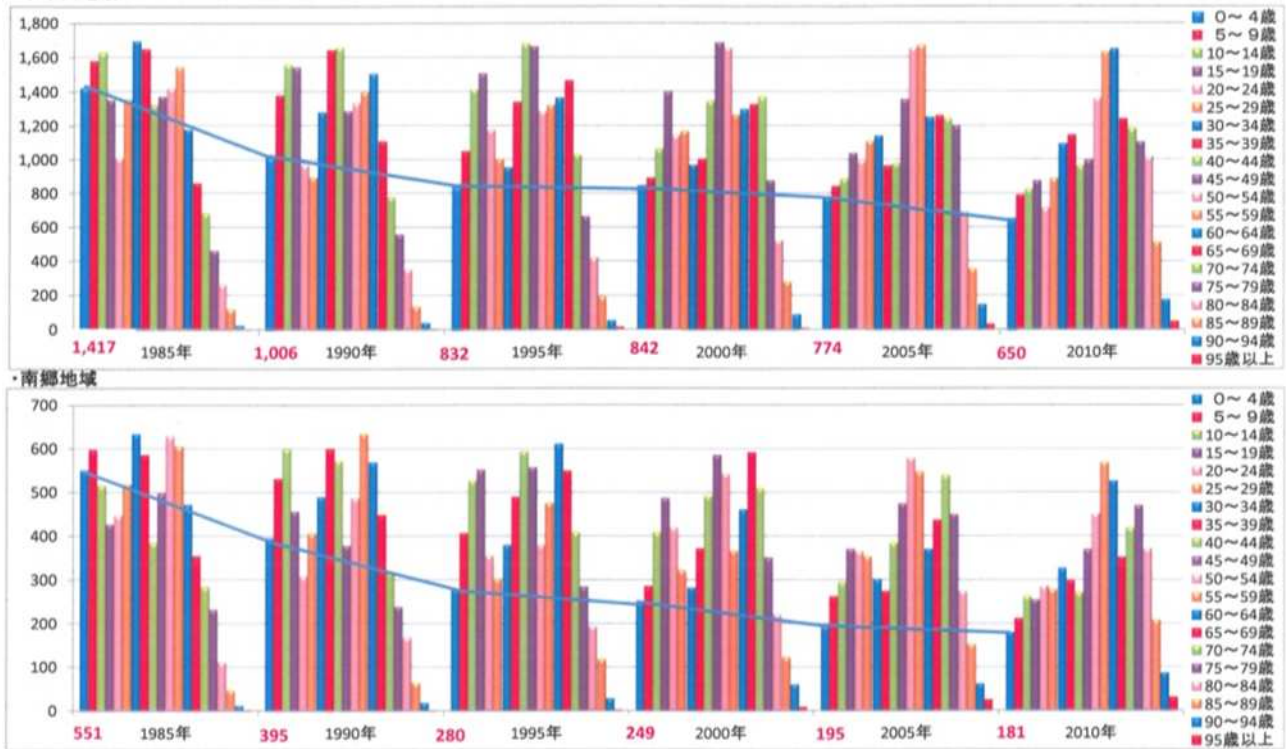


図6のうち、上下両地域、各年のグラフの左端の青色の棒に注目してください。

各グラフの左端の青色の棒は調査時各年の0歳～4歳人口をあらわしています。次ページの図6-1では、両地域の各年における0歳～4歳人口の変化を視覚的にわかりやすくするため、各年の0歳～4歳人口の青色の棒の上辺中央点を青色の線でつなぎました。その結果、つないだ青線はいずれも著しい右下がりとなっていることがわかります。

また、図6-1の各グラフの左下には各年の0歳～4歳人口を朱書きしておきました。小牛田地域では、1985年の0歳～4歳人口は1,417人でしたが、2010年には650人となり54.1%も減少しています。南郷地域においても85年の0歳～4歳人口は551人でしたが、2010年には181人と67.2%も減少しています。旧町両地域において、1985年から2010年までの25年の間に、0歳～4歳人口が著しく減少していることが次ページの図6-1から視覚的に読み取れます。

図 6-1 美里町人口 5 歳区分年齢別人口の推移 (1985 年 ~ 2010 年)



次に、前ページの図 6 のグラフを別の角度から加工します。図 6 のグラフでは 1985 年から 2010 年までの各グラフの数値が 5 年間隔のデータであることから、5 歳区分による各集団のそれぞれの棒は、5 年後の右隣のグラフにおいてはそれぞれ一つずつ右隣の別の色の棒に移動することとなります。例えば、1985 年の 0~4 歳人口の青色の棒は 90 年には 5~9 歳の赤色の棒になり、95 年には 10~14 歳の緑色の棒になります。このことを利用して、5 歳区分の各集団が 5 年後にどのように変化 (増加又は減少) したのかをグラフ上で視覚的に確認できるようにするため、それぞれの上辺中央部を青色の線でつなぎました。それが次ページの上の図 6-2 です。

図 6-2 でつながれた青色の線は、わずかな右上がり又は横ばいの線がほんの一部に見られるものの大半の青色の線は右下がりとなっています。このことから 5 歳区分された各年齢層の大半の集団は、その後の 5 年間に於いて減少していることがわかります。

また、ここで注目すべき線は、著しく右肩下がりとなっている、15 歳~19 歳 (紫色) から 20 歳~24 歳 (桃色) へ移行する線です。これを、視覚的によりわかりやすくするため、各グラフ間の 15 歳~19 歳から 20 歳~24 歳へ移行する線を赤色の太い線で上塗りしました。それが次ページの下図 6-3 のグラフです。この年齢層の集団は、すべてのグラフにおいて突出して著しい右肩下がりとなっており、15 歳~19 歳から 20 歳~24 歳へ移行する 5 年間で、著しい人口減少が起きていることがわかります。これは当然に、高校卒業後の進学又は就職を原因とする転出によるものと考えられます。

図 6-2 美里町人口 5 歳区分年齢別人口の推移 (1985 年 ~ 2010 年)

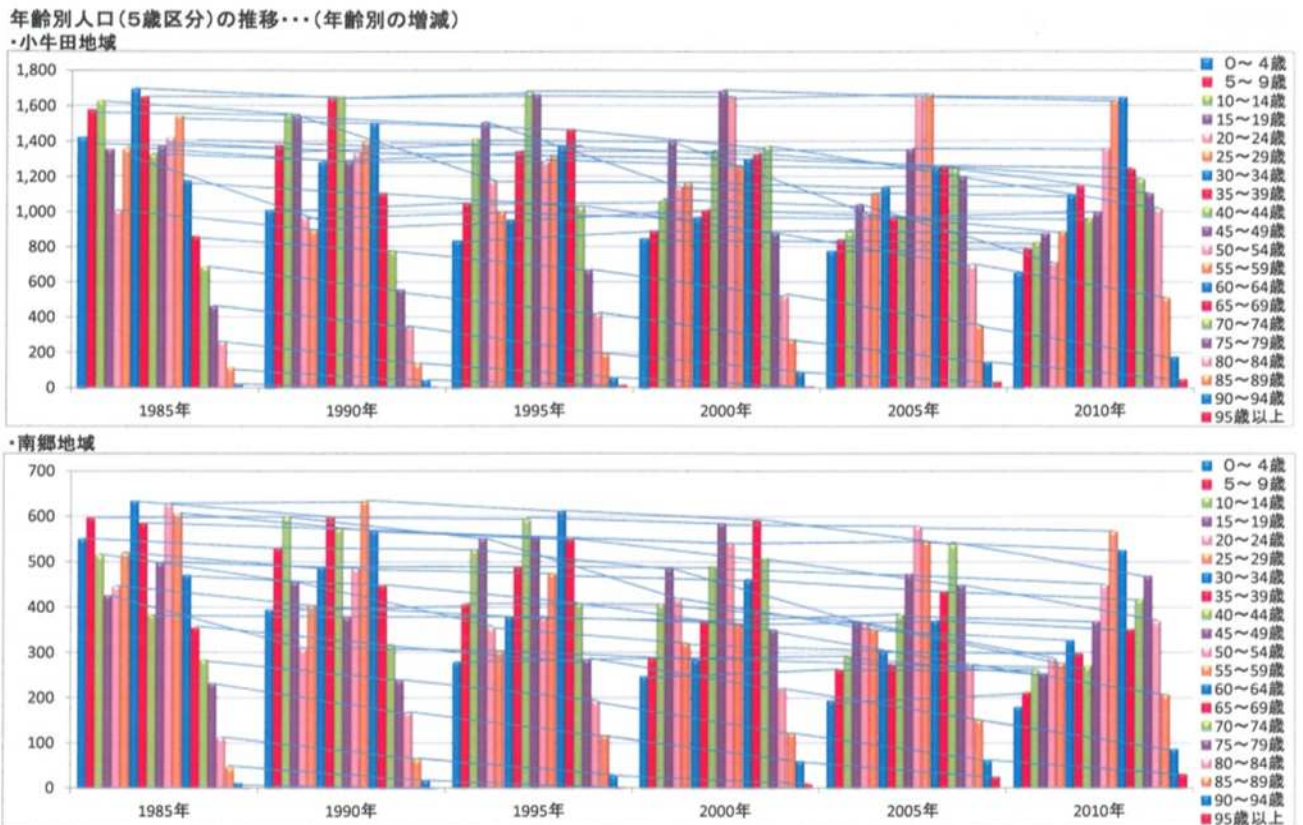
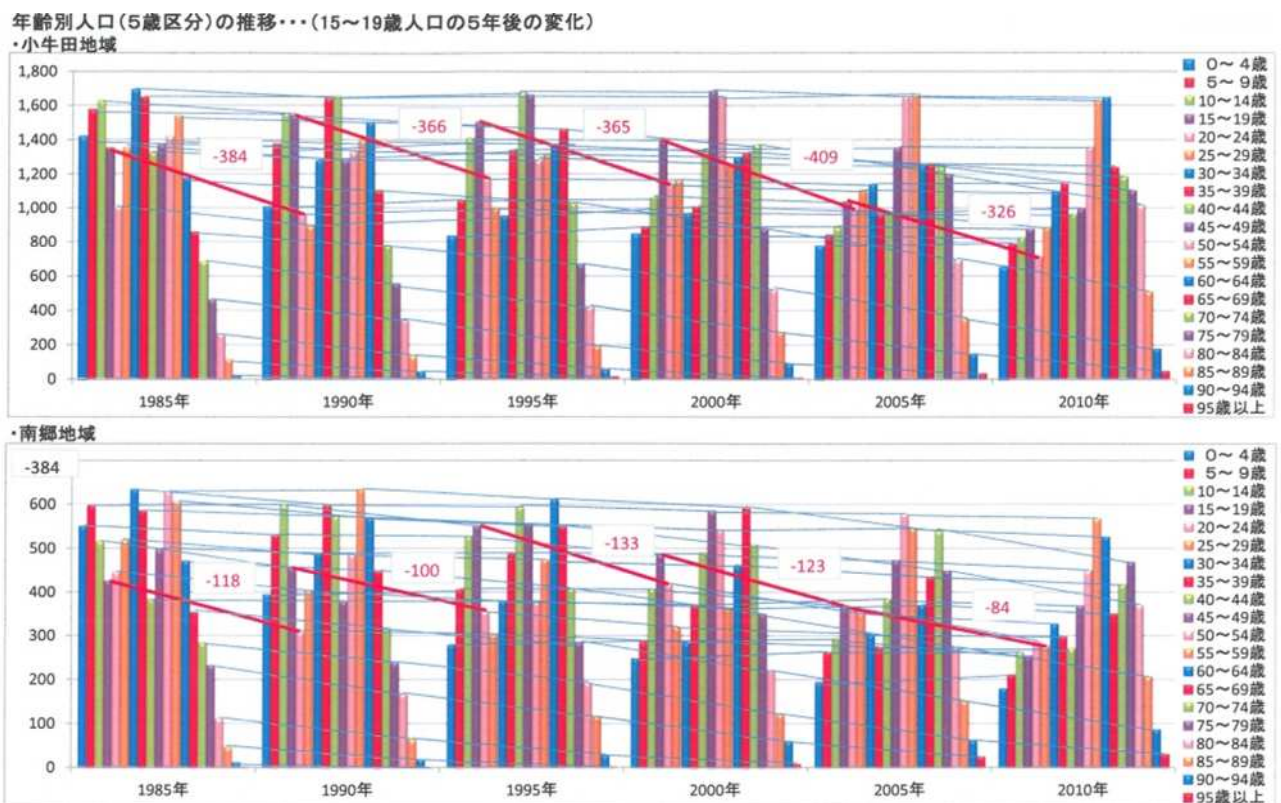


図 6-3 美里町人口 5 歳区分年齢別人口の推移 (1985 年 ~ 2010 年)



4) 合計特殊出生率の推移

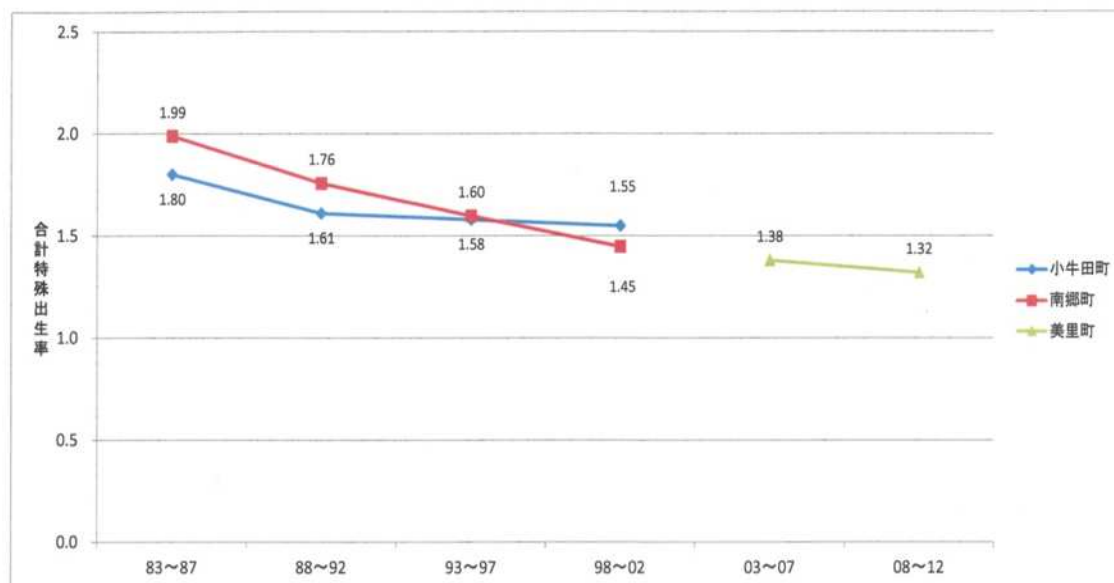
次に、美里町における合計特殊出生率のこれまでの推移について見てみます。

図7の表とグラフは、厚生労働省が公表している人口動態保健所・市区町村別統計(人口動態統計特殊報告)から、美里町の合計特殊出生率の推移についてまとめたものです。

なお、合計特殊出生率については一般的に単年毎に算出されるものでありますが、市区町村別の合計特殊出生率については単年で算出するのに標本数(出産者数)が少ないため、厚生労働省では5年間の標本数の合算から合計特殊出生率を算出しています。そのため、図7のように5年間で区切った各期間における合計特殊出生率として公表されています。

図7 合計特殊出生率の推移

	1983-1987	1988-1992	1993-1997	1998-2002	2003-2007	2008-2012
小牛田町	1.80	1.61	1.58	1.55	美里町 1.38	美里町 1.32
南郷町	1.99	1.76	1.60	1.45		



1983～87年(昭和58～62年)の5年間の合計特殊出生率は、旧小牛田町で1.80、旧南郷町で1.99と現在に比べて高い水準を維持していました。しかし、その後に低下を続け、合併後の2008～12年(平成20～24年)の合計特殊出生率は1.32となり、この25年間に於いて旧両町を平均して0.58ポイント、低下率にして30%の低下となりました。こうした合計特殊出生率の低下は、2ページの図2で見た全国の合計特殊出生率の推移と同様の傾向にあると言えます。

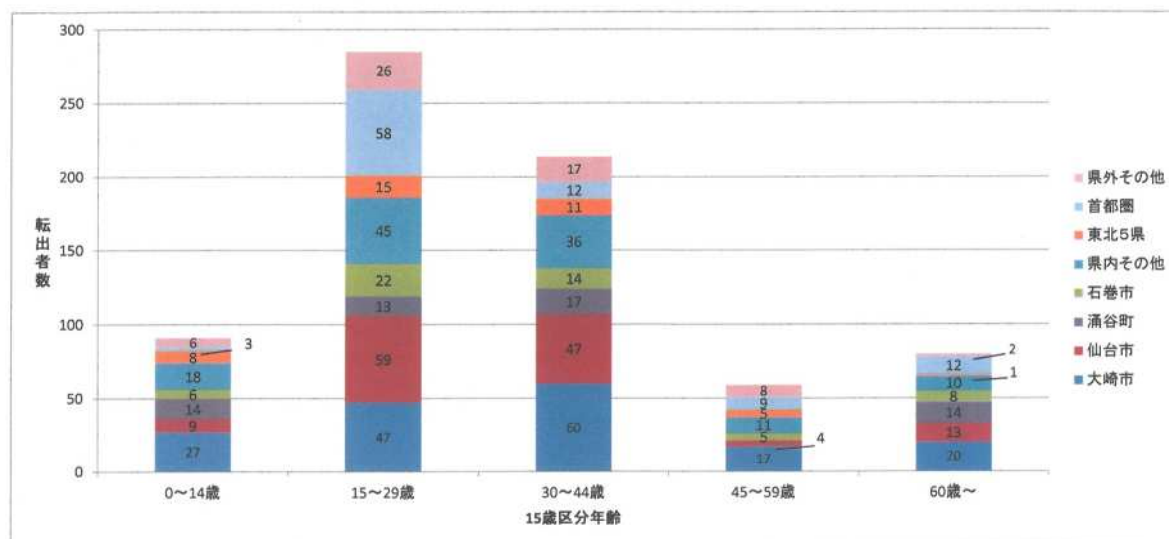
5) 転出者の転出先住所地

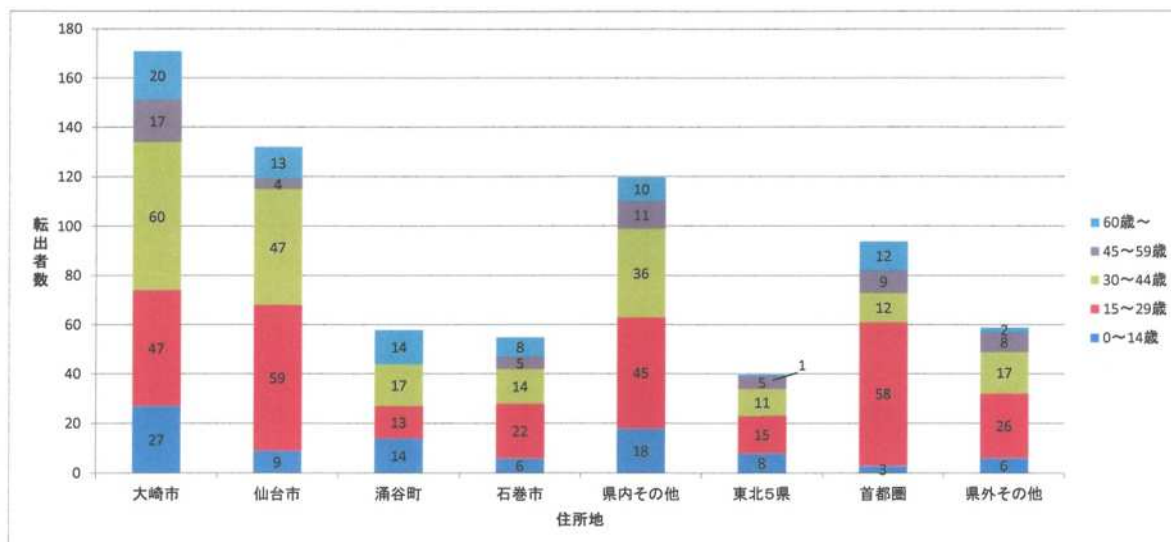
町内から転出する人たちは、どこへ転出しているのでしょうか。次に、転出者の転出先の現状について見てみます。

図8の表とグラフは、2013年1月から12月までの転出者の転出先住所地について、15歳区分年齢別人口でクロス集計したものです。

図8 転出者の転出先住所地

年齢区分		0-14歳	15-29歳	30-44歳	45-59歳	60歳～	計
転出先住所 地	大崎市	27	47	60	17	20	171
	石巻市	6	22	14	5	8	55
	涌谷町	14	13	17	0	14	58
	仙台市	9	59	47	4	13	132
	県内 其他市町村	18	45	36	11	10	120
	(再掲・県内)	(74)	(186)	(174)	(37)	(65)	(536)
	県外 東北5県	8	15	11	5	1	40
	首都圏 4都県	3	58	12	9	12	94
	県外 その他	6	26	17	8	2	59
	(再掲・県外)	(17)	(99)	(40)	(22)	(15)	(193)
計	91	285	214	59	80	729	





転出先として最も多いのは大崎市で 171 人(23.5%)、次いで仙台市 132 人(18.1%)、県内その他市町村 120 人(16.5%)と続きます。県内と県外を比較すると、県内転出が 536 人(73.5%)で、県外転出が 193 人(26.5%)です。県外への転出は 4 人に 1 人の割合にとどまっています。そのうちの約半数(94 人)は首都圏(東京都、埼玉県、千葉県、神奈川県)への転出者となっています。

年齢層別に見ると、15 - 29 歳が 285 人(39.1%)と最も多く、次いで 30-44 歳が 214 人(29.4%)と続きます。15 - 29 歳の年齢層の転出要因としては高校卒業後の就職や進学、大学卒業後の就職などが考えられ、30-44 歳の年齢層の転出には仕事や家庭、住宅の取得などさまざまな理由が考えられます。また、30-44 歳の年齢層の転出においては単身での転出ではなく家族単位での転出が多いのではないかと考えられます。

次に、転出者の年齢層と転出先住所地をクロスして見てみます。15 - 29 歳の仙台市への転出が 59 人、同じく 15 - 29 歳の首都圏への転出が 58 人、また、30-44 歳の大崎市への転出が 60 人、同じく 30 - 44 歳の仙台市への転出が 47 人、これらが他に比べて多いことがわかります。大崎市と仙台市については 30-44 歳だけでなく 15 - 29 歳においても高い数値を示していることから、15 歳から 44 歳の幅広い年齢層において、多くの人たちが大崎市又は仙台市を転出先としていることがわかります。

6) 将来の推計人口

それでは、美里町の将来人口はどのようになるのでしょうか。最後に美里町の将来人口について見ていきます。

市町村単位の将来人口の推計方法にはいくつかの方法がありますが、今回は国立社会保障・人口問題研究所が2013年3月に推計した「日本の将来推計人口」から、美里町の将来人口の中位推計を取り上げます。

図9-1 美里町人口 将来人口の推計（2010年～2040年）

資料：国立社会保障・人口問題研究所の「日本の将来推計人口」（平成25年3月推計）

男女計 総数	2010年	2015年	2020年	2025年	2030年	2035年	2040年	2010→2040増減	
0～4歳	831	739	649	579	524	487	450	-381	-45.8%
5～9歳	1002	858	747	657	587	532	493	-509	-50.8%
10～14歳	1089	991	847	737	648	579	525	-564	-51.8%
15～19歳	1136	1049	966	825	718	631	564	-572	-50.4%
20～24歳	1011	1007	919	847	723	628	552	-459	-45.4%
25～29歳	1174	875	954	871	804	686	596	-578	-49.2%
30～34歳	1430	1121	863	943	862	794	678	-752	-52.6%
35～39歳	1449	1393	1115	859	939	858	791	-658	-45.4%
40～44歳	1240	1439	1381	1107	854	933	853	-387	-31.2%
45～49歳	1371	1235	1434	1376	1104	854	931	-440	-32.1%
50～54歳	1818	1350	1227	1426	1365	1098	851	-967	-53.2%
55～59歳	2210	1792	1326	1207	1402	1343	1081	-1129	-51.1%
60～64歳	2183	2148	1744	1296	1182	1373	1315	-868	-39.8%
65～69歳	1599	2123	2075	1688	1263	1155	1342	-257	-16.1%
70～74歳	1607	1507	2002	1960	1598	1202	1101	-506	-31.5%
75～79歳	1579	1436	1341	1794	1763	1440	1090	-489	-31.0%
80～84歳	1393	1345	1210	1134	1532	1510	1240	-153	-11.0%
85～89歳	722	1020	992	914	865	1185	1172	450	62.3%
90歳以上	346	520	728	828	847	846	1036	690	199.4%
(再掲)0～14歳	2922	2588	2243	1973	1759	1598	1468	-1454	-49.8%
(再掲)15～64歳	15022	13409	11929	10757	9953	9198	8212	-6810	-45.3%
(再掲)65歳以上	7246	7951	8348	8318	7868	7338	6981	-265	-3.7%
(再掲)75歳以上	4040	4321	4271	4670	5007	4981	4538	498	12.3%
中位数人口年齢	54歳						59歳		

図9-2 美里町人口 将来人口の推計（2010年～2040年）



国立社会保障・人口問題研究所の推計によれば、2040年の美里町の総人口は16,661人まで減少すると予測されています。2010年の国勢調査の人口と比較すれば8,529人、減少率にして33.9%の減少となり、2010年からの30年間で町の人口の約3分の1が減少するものと見込まれています。また、年齢3区分別人口で見ると、0歳～14歳の年少人口が49.8%の減少、15歳～64歳の生産年齢人口が45.3%の減少、しかし65歳以上の高齢人口については3.7%のわずかな減少となります。

以上のことから、25年後の2040年の美里町における人口ビジョンについては、次のように要点をまとめることができます。

2040年には、町の総人口は現在の3分の2になる

2040年には、町の年少人口と生産年齢人口は現在の半分になる。

しかし、町の高齢人口はわずかに減少するものの現在とほぼ変わらない。

これが25年先の美里町の人口の姿であることを私たち一人ひとりが認識しておかなければなりません。

なお、今回の国立社会保障・人口問題研究所の推計は2010年までの国勢調査データに基づくコーホート法によるものであるため、2011年以降の本町の駅東地区における人口増加は推計に考慮されていません。駅東地区における人口増加によって本町の今後の人口減少に多少の歯止めはかかりますが、しかしそれも一時的なものであり、今後の人口減少に対して楽観できるものではありません。

3 おわりに

これまで、美里町人口減少社会対策会議で収集した資料から、全国人口と美里町の人口について、これまでの推移と将来推計の概略を様々な角度から観察してきました。

2005-10年にピークを越えた全国人口は、今後も減少傾向が続き2055年には現在の人口の3分の2まで減少します。美里町においては、全国人口の推計よりも早い時期の2040年に現在の人口の3分の2まで減少すると見込まれています。その後においても、全国的にも美里町においても人口減少は続き、このまま無策ならば美里町の人口は将来的には現在の半分以上まで減少することも想定しなければなりません。

どのような人口減少にもその理由と原因があります。第1次中間報告書の中で見てきた美里町のこれまでの人口の推移から人口減少となったその理由と原因を探り、今後の有効な解決策について、職員はもとより町民の皆さんと共に考え、共に話し合い、その方向性を見つけていくことが今後の検討会議の次の作業となります。